

イヌの仇討

（井上ひさし金芝郎との五所収、新潮社刊）

こまつ座 第130回公演

井上ひさし 作

東憲司 演出



大谷 亮介
彩吹 真央
俵木 藤汰
植本 純米
田鍋 謙一郎
石原 由宇
大手 忍
尾身 美詞
原口 健太郎
西山 水木



音楽 宇野誠一郎
美術 石井雄司
照明 小沢大介
音響 桑田洋一
衣裳 中村健一
所作指導 花柳けい
宣伝美術 安野光雄
演出助手 宮田清彦
舞台監督 白石英輔
制作統括 井上麻矢
制作 松岡一衣
干原光一

イヌの仇討

井上ひさし作
東憲司 演出



時代の真実は虚偽と嘘だらけ。
果たして、吉良上野介は本当に悪者だったのか、
赤穂浪士は本当に義士なのか、忠臣蔵は本当に美談なのか？
歴史のからくりと人間のドラマ、
現代を鋭く見つめる井上戯曲の神髄が東憲司の手によって再び！

討ち入り当日、密室でお犬様と炭焼き小屋に隠れていた吉良上野介はどんな思いで首をはねられるまでの二時間を過ごしたのか。吉良の目線から、その知的な興味を駆使して語られるスリリングな舞台運びは、作者の目で見た忠臣蔵のもう一つの側面を浮かび上がらせる。大石内蔵助の登場しない忠臣蔵は逆に、彼を鮮明に浮き立たせ、移り気でそして見えない「大衆」の力によって美談として今に伝聞されるべき、作られた「忠臣蔵」になったのか。さて、その真実は？
1988年の初演から32年が経過しながらも、なお現代の我々に問いかけ続ける「忠臣蔵」異聞

時は元禄十五年（一七〇二）
十二月十五日の七ツ時分（午前四時頃）。

有明の月も凍る寒空を、裂帛の気合、不気味な悲鳴、そして刃に刃のふつかる鋭い金属音が駆け抜ける。大石内蔵助以下赤穂の家来衆が、ついに吉良邸内に討ち入った。狙う仇はただ一人。

「吉良上野介義興」

ところが、やっこの思いでたどりついた上野介の御寝間には蛇の殻だった。上野介は、家来、側室、御女中たちと御勝手台所の物置の中に逃げ込んでいた。赤穂の家来が邸内を二時間にわたって、三度も家探ししていた間、身を潜めていたというあの物置で、彼らの心に何が起ったのか。

討ち入りから三百十八年、歴史の死角の中で眠っていた物語が今、明かされる。



田鍋謙一郎 植木純米 俵木藤汰 彩吹真央 大谷亮介
西山水木 原口健太郎 尾身美詞 大手忍 石原由宇

思えば、あの白髪品のいい老人が気の毒でならぬ。ある日、些細なことを根にもたれ、いきなり切りつけられたばかりか、あげ句の果てには殺されて、壮大な貴種流離源のために、三百年間、悪く言われ放しあの老人を、私はときどき手を合わせて拝みたくなる。

井上ひさし

井上ひさし版忠臣蔵「イヌの仇討」には浅野内匠頭も大石内蔵助も出てこない。仇役吉良上野介に光を当てた異色作である。討ち入られてからの二時間、逃げ隠れた物置のみで進行する物語の台詞の数々は暗闇の中で光り輝き、豊かに広がり、人間の生きる性を問い正してくれる。

権力に忠実なイヌとして生きてきた一人の老人を慈しみながらも、滑稽に笑い飛ばし、厳しく残酷に打ちのめす。この物語は三百年前に起きた事件を通して現在の日本の恥部をも晒けだしているようにも思える。僕にとってこの戯曲は挑戦である。赤穂浪士のごとく武者震いし、そして吉良上野介のように怯えている。いずれにしろ覚悟を決めて、作者の愛溢れる言葉の渦に飛び込んでゆくのだ。

東憲司



〈2020年・第314回〉

旭川市民劇場4月例会

3月31日 火 6:30

4月1日 水 1:30

会場/旭川市公会堂 上演時間 2時間15分 (休憩15分含む)

旭川市民劇場 旭川市3条通8丁目 緑橋ビル1号館2F

入会のご案内	
入会金	2,000円
会費(月)	一般 2,500円
	大学生 1,000円
	中高生 500円

会員になると年6回の演劇を鑑賞できます。
詳しくは旭川市民劇場まで

TEL0166-23-1655

旭川市民劇場 次例会のご案内

6月例会 前進座

『ひとごころし 喜劇一幕』

6月10日(水) 6:30

11日(木) 1:30

原作/山本周五郎

出演/中嶋宏太郎ほか

